第２学年　社会科　学習指導案

研究主題との関連

１　新潟市中学校教育研究協議会の研究主題
「社会認識を高め、確かな学力を育てる授業はどうあるべきか」
　新潟港を中心とした江戸時代の新潟町の様子をつかみ、その繁栄の要因を多面的・多角的に追究し、関連付けて考察することで「事実認識」「関係性認識」が成される。そしてこの学習を来年度の公民での学習や修学旅行や総合的な学習に生かしていくことで「価値認識」が進む。これらの学習を通して、社会認識が高まり、社会的判断力や実践力が育成されると考える。

２　当校の研究主題
「THE 追究　～「私が」と「私たちが」を通してより高め合っていける生徒の育成～」
　第１学年での総合学習を基に、本単元の学習を行う。また、この学習は来年度の公民での学習や修学旅行や総合的な学習に意図的につなげていくことで、ぶつ切りの授業ではなく、追究し続けることができる。生徒は生徒間での関わり合い、地域の方々との関わり合い、他の地域の方々との関わり合いの中で追究し続けることができ、自らの地域・社会に生きる人材を育成できると考える。

１　単元名
「江戸時代の産業や交通の発展と町人文化　～新潟湊の繁栄から探る～」

２　単元の目標
〇江戸時代の産業や交通の繁栄を地域的事象から追究し、新潟では町人文化が新潟湊を中心に形成されたことや生活文化が生まれたことを説明することができる。

３　評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	技能	知識・理解
・新潟湊に関わる人々の生活の様子を意欲的に追究している。 ・身近な地域の文化財と関連付けて考察しようとしている。	・新潟湊が発展した理由を説明することができる。 ・新潟町では新潟湊を中心として町人文化が形成されたことを絵日記に表現することができる。	・自らが担当する資料を適切に読み取ることができる。	・新潟町では新潟湊を中心として町人文化が形成されたことを理解している。

４　単元と指導の構想
(1)単元観
□中学校学習指導要領(平成 29 年度告示)を受けて

本単元は、中学校学習指導要領(平成 29 年度告示)社会編　歴史的分野(２)内容の B の(３)に以下のように位置付けられている。

(３)近世の日本
　課題を追求したり解決したりする活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア　次のような知識を身に付けること。
(ｱ)世界の動きと統一事業
(ｲ)江戸幕府の成立と対外関係
(ｳ)産業の発達と町人文化
　産業や交通の発達，教育の普及と文化の広がりなどを基に，町人文化が都市を中心に形成されたことや，各地方の生活文化が生まれたことを理解すること。
(ｴ)幕府の政治の展開

イ　次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。
(ｱ)交易の広がりとその影響、統一政権の諸政策の目的、産業の発達と文化の担い手の変化、社会の変化と幕府の政策の変化などに着目して、事象を相互に関連付けるなどして、アの(ｱ)から(ｴ)までについて近世の社会の変化の様子を多面的・多角的に考察し、表現すること。
(ｲ)近世の日本を大観して、時代の特色を多面的・多角的に考察し、表現すること。

　また、内容の取扱いについて「産業や交通の発達については、身近な地域の特徴を生かすようにする」とされている。本単元では新潟港を中心とした産業や交通の発達を学び、それを基に社会的な文化の広がりと関連させ、現在との結びつきに気づかせるようにする。
　「都市」を「政治の中枢」ととらえたとき、身近な地域の都市は高田藩や新発田藩の中心部であると考える。一方で「商業の中心地」ととらえたとき、16 世紀初めは蒲原津・沼垂湊・新潟津のあたりを指すと考える。上記枠内の事項を達成するために、都市を後者でとらえ、当時の社会経済活動を基にして生活文化が生まれていったことをとらえることが望ましいと考える。そして、三ヶ津(蒲原津・沼垂湊・新潟津)の中では時代が進むにつれて新潟津が商業の中心として盛り上がりを見せた。
　また、新潟津のあたりは、本校が位置する場所であり、現在との結びつきを感じさせるモノも数多く残っている。町屋が連続して残存しており、当時廻船問屋であった旧小澤家住宅もある。他にも、白山神社には北前船で隆盛を誇った市島次郎吉家が、新潟湊における御城米（幕領の年貢米）積み出しの風景を描かせて奉納した大船絵馬が所蔵され、金比羅神社には持ち船が遭難から救われたことに感謝して、北前船の廻船問屋・鈴木弥五左衛門が奉納した難船彫刻絵馬や北前船船主や国の有形民俗文化財に指定されている船頭が海上安全を願って奉納した北前船の模型和船がある。湊稲荷神社には、北前船船頭たちが長く湊にとどまるよう、遊女たちが高麗犬をまわして願をかけたといわれている懸け高麗犬もある。これだけの歴史的文化財を活用することで、現在との結びつきに気づくとともに、地域に生きる子どもを育成することができる。
□修学旅行や総合的な学習との関連
　当該学年の生徒は、昨年度に総合的な学習の中で「地域を学ぶ」というテーマで追究した。来年度の修学旅行では、新潟の物産品を大阪まで持って行き商店街で販売を行う商人体験が予定されている。この商

人体験を歴史的な背景を踏まえ活動にあたらせたいというのが、授業者を含む学年職員の願いである。また、新潟と大阪の関係性や違いについて学びを深めるために、大阪歴史博物館にも来館する予定である。

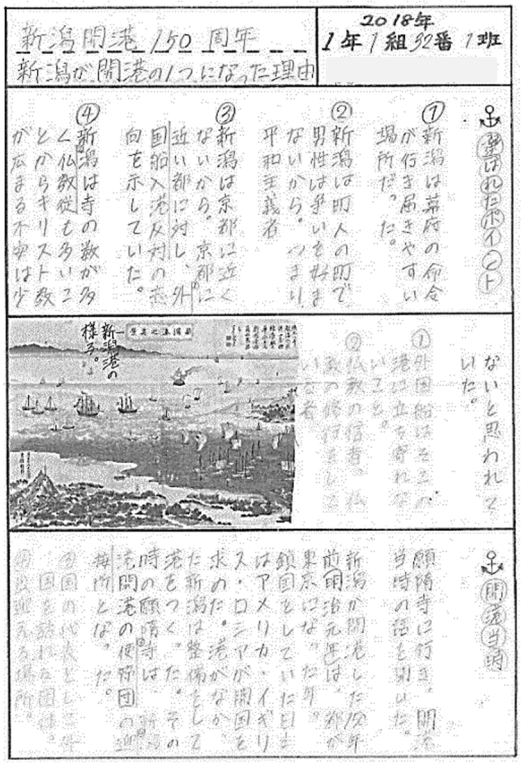
来年度の総合的な学習の中では「SHIMOMACHI 探検ツアー」を実施する。地域の文化や歴史に対する理解を深め，下町で活動する方々の思いに触れながら，自分達にできる活動を実行していく中で，自分の住む地域を大切にしようとする気持ちを養うということをねらいに、自らの地域を外国人観光客や他の地域の方々に対して PR ガイドをするという内容である。

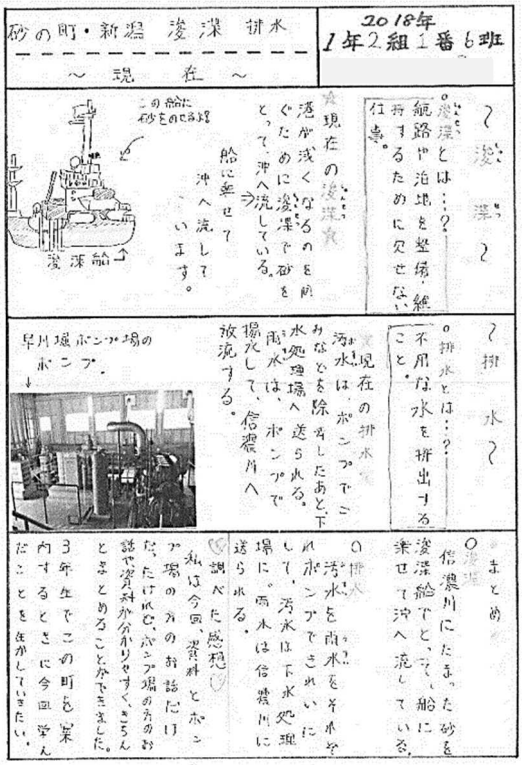
上記のことを踏まえたとき、本単元を扱うことで身近な地域についてより深い理解ができ、今後の活動に大いに生かすことができる。自らの地域を拠点として学び続けたり、過去を踏まえ将来を見据えた現在を創造したりすることで社会認識が高まり、確かな学力を育てることができると考える。

(2)生徒観

１年時の総合的な学習で「みなとまち新潟日本遺産」「港町新潟　新潟の形」「砂の町仁方　砂防林・砂丘」「砂の町新潟　浚渫・排水」「新潟開港 150 周年」「奉納和船模型」の６つのテーマに分かれ、自らの地域を校内外で学習をした。そしてその成果をポスターにまとめている。テーマによって学習した内容に違いは見られるが、新潟町は新潟砂丘が広がっていて様々な問題を引き起こしていること、過去に港として栄えて賑わいを見せていたことは認識している。加えて、自らの地域にはそのことがわかる施設や文化財が多く残っていることも認識している。しかし、その認識はまだ浅く、それらが残る自らの地域を誇りに思う生徒は少ない。

１学年時に作成したポスター





また、本学級の生徒は男女の垣根無く交流することができる。これは、生徒間の対話を促進させるよい点と考える。しかし、交流する中で、学力の高い人の判断に任せてしまったり、考えることをあきらめて多数決で決めたりする様子が観られた。この点は、深い学びへつながりづらい改善すべき点であると考え

る。

(3)指導の構想

まず、身近な地域の江戸時代の様子を知る。1学年時に総合的な学習で学んだことを振り返ったりブラタモリを視聴したりすることで、新潟湊を中心に町がつくられ人々が生活していることが理解できる。それと同時に、「砂の町」と称されるほど新潟町の海辺には砂丘が広範囲に広がり、湊を管理する上で砂が悪影響を及ぼしていることを再確認する。当時は水戸教とよばれる人々が入港する船を安全に停泊地まで誘導したり、座礁する船があった場合には海難救助も行ったりして対応したことを伝える。新潟港の重要性を感じさせるとともに、「江戸時代の新潟湊が発展した理由はなにか」という課題をつくりあげたい。

その後、その理由を明らかにするためにジグソー学習に取り組む。班の仲間と分担し、調べ活動にあたる。個人追究終了後、他班の似たテーマを追求しているグループを組織し、追究内容の確認と強化を行う。そして、自らの班に戻り、ファシリテーション形式でまとめさせる。多面的・多角的に追究した内容の関連性を視覚化させ、最後は言葉でまとめさせる。

5　単元の指導計画

次	時	○学習のねらい　・主な活動内容	評価				
			関	思	技	知	評価規準
第1次	1	○江戸時代の新潟町について、新潟湊を中心に栄えている様子を捉える。 ・江戸時代の新潟町の様子を調べる。	○			○	・新潟町の様子を意欲的に捉えようとしている。 ・新潟湊を中心として人々が生活をしていることを理解できる。
第2次	2	○新潟湊が発展した要因について予想を立て、追究の見通しを持つ。 ・新潟湊が栄えた要因について予想を立て、班ごとにジグソー学習に取り組む手立てを考える。	○	○			・新潟湊が発展した要因について、仲間と協働的して、多面的・多角的に考察しようとしている。
	3	○自らが担当するテーマから、新潟湊が発展した要因について理解する。 ・自らが担当するテーマで調べ学習を行う。 ・同じテーマを担当した仲間と調べた内容を共有・強化する。		○	○		・自らが担当する資料を適切に読み取ることができる。

	4（本時）	○新潟湊が発展した要因について、多面的・多角的に追究することを通して、後背地の新田開発、舟運の活性化とそれを支えた２つの河川、交通路の整備や新田開発の奨励などの幕府による政策、北前船が行き交う中での売買などが関連していることに気付き、そのことを説明することができる。 ・それぞれが調べたことを班で共有し、まとめる。 ・新潟湊が発展した理由について説明する。		○	○		・新潟湊が発展した要因について、多面的に説明することができる。 ・新潟湊が発展した要因について、仲間と協働的して、多面的・多角的に考察することができる。
第3次	5	○江戸時代の身近な地域について、これまでの学習を基に当時の人々の生活の様子を想起し、絵日記に表現する。 ・どのような人の生活なのか明確にした上で絵日記を書く。	○			○	・江戸時代の新潟湊を中心とした生活について、既習事項を基に想像しようとしている。 ・既習事項を適切に表現できている。
	6	○江戸時代の身近な地域について、前時に作成した絵日記を共有し、ベスト３を選ぶことを通して、町人文化が新潟湊を中心に形成されたことや生活文化が生まれたことを理解する。 ・自らが作成した絵日記を発表する。 ・仲間が作成した絵日記を評価し、クラスのベスト３を決める。		○		○	・江戸時代の新潟湊を中心として町人文化が形成されたことを理解している。

６　本時の計画（4時間目／全６時間）

（１）ねらい

新潟湊が発展した要因について、多面的・多角的に追究することを通して、後背地の新田開発、舟運の活性化とそれを支えた２つの河川、交通路の整備や新田開発の奨励などの幕府による政策、北前船が行き交う中での売買などが関連していることに気付き、そのことを説明することができる。

（２）指導の構想

前々時に、「江戸時代の新潟湊が発展した理由はなにか」という学習課題を設定し、それに向けて追究活動の手立てを考えた。そして、前時までに「越後の農民」「北前船の船主」「幕府の役人」「新潟町の町人」に分かれ、個人追究を行った。

本時では、１班４人のグループを組織し、それぞれの資料から分かったことを共有し、まとめていく中で、「江戸時代の新潟湊が発展した理由は何か」明らかにしていく。

前時までに追究して分かったことを付箋に書き、本時ではそれを共有し、グルーピングしたり関連付けたりしていく。その中で、後背地の新田開発、舟運の活性化とそれを支えた２つの河川、人口増加などの新潟町の発展や、交通路の整備や新田開発の奨励などの幕府による政策、北前船が行き交う中での売買などが関連していることに気付くことができると考える。ファシリテートしたものを基に、学習課題に対するまとめを形成していく。班ごとにまとめの文をホワイトボードに書き、共有し、学級のまとめにつなげる。

（３）展開

学習活動	教師の働き掛けと 予想される生徒の反応	○留意点 ■評価
導入 ・学習課題の確認（5 分）	T：私たちが追究している課題は何でしたか。 S：江戸時代の新潟湊が発展した理由はなにか。 学習課題「江戸時代の新潟湊が発展した理由はなにか」 T：そのために私たちは何をしてきましたか。 S：自分の資料を読み解いた。 S：自分と同じ資料の人と調べた内容を確認し合った。 S：エキスパート学習をした。 T：この後は、どのように追究をしていきますか。 S：他の資料を調べた人と調べた内容を伝えあってまとめる。 S：ジグソー学習をする。	○前々時に課題は提示してあるため、本時では時間をかけず確認だけする。
展開１ ・調べてきた内容を各班でファシリテートする（25 分）	T：それでは今の班で、調べた内容を共有しましょう。前時に調べて分かったことを付箋に書きました。その付箋を出しながら似ているものをまとめたり、関連付けたりしてください。20 分後ファシリテートした内容を発表してください。 S1：「越後の農民」 ・江戸時代の越後は新田開発が進み収穫高が約３倍に増えた。 ・治水の工事や低湿地の干拓などの新田開発が行われた。 ・海岸砂丘の後背湿地に広がる塩津潟などが開発された。 ・育てたお米の約半分が年貢米（税金）として納められた。 ・自分の村の蔵に入れておいて、信濃川や阿賀野川を使った内陸の舟運で新潟湊まで米を運んでもらっていた。 ・信濃川や阿賀野川を使った内陸の舟運で長岡、村松、村上、会津藩などの蔵米や売買する米が新潟湊へ集まり、他地域からのモノが内陸の町へ運ばれた。	■仲間と協働的して多面的・多角的に考察することができる。 ○事象と事象を関連づけ、それを可視化できるよう机間指導をする。

・新潟湊からは大阪の蔵屋敷へ海の舟で運び、納めていた。

S2：「北前船の船主」

・北前舟とは蝦夷地から大阪までの間をめぐり、安いところで品物を仕入れ、高いところで売ることで売っていた舟のことである。
・新潟湊で買い上げたものの中ではお米がとても多い。
・当時米を栽培できなかった蝦夷地では、米、酒、みそなどは必要な物資であり、新潟で買い上げ、松前で売り上げた。
・新潟から大阪までは一か月半かかった。
・新潟では魚介類や塩、木綿などがたくさん売れた。
・西風が吹くと舟が出せないので、新潟の冬は特に泊まることが多かった。
・各地の特産品を売り買いして巡ることで、さまざまな文化も運ぶこととなった。

S3：「幕府の役人」

・年貢米がなかなか幕府に集まらない。
・全国で新田開発を進めさせた。
・年貢米を運ぶ海上航路を川村瑞賢に整備するよう任命した。
・東北地方の年貢米を大都市の江戸や大阪に運ぶために西廻り航路と東回り航路を整備した。
・具体的に、廻漕船の選定、物流拠点の整備、廻漕船の援助（入港税の免除など)、寄港地の限定と整備を行った。
・陸路を経由しないルートを作ることで早く年貢米を輸送することができるのとともに、その経費も削減することができた。
・その航路を利用することで以前よりも商人たちも簡単に長距離輸送することができた。

S4：「新潟町の町民」

・商人は農村や北前船から仕入れ、町で販売している。
・新潟湊には堀がきれいに整備されていた。
・新潟町には商人たちが町の一画建てた蔵が多くあった(町蔵)。
・様々な藩や代官は町蔵に年貢米を預け、新潟で売却してもらったり、大阪まで運んでもらったりしていた。
・町蔵に収めたり店で売ったりするものは、町の中にある縦横７本の堀を使って小舟で運んだ。
・町民たちは毎年春先になると、大掛かりな川の浚渫と清掃をした。

	T：それでは発表してください。 S：私たちの班はこのようにまとめました。お米が新潟湊に川から集まってきて、大阪や蝦夷地に流れていくことが分かりました。 S：私たちの班ではこのようにまとめました。幕府が航路を整備したり新田開発を進めさせたりしたことで、新潟湊はたくさんお米が集まるようになり、他の地域の特産品も手に入れられたことが分かりました。	
展開２ ・各班でまとめる（10 分）	T：それでは今の発表を聞いて、班でまとめの文章をつくりましょう。 S：新潟湊は信濃川と阿賀野川が合流するところに位置していて、多くのお米が集まる。そしてそのお米は北前船によって江戸や大阪、蝦夷地まで運ぶことができるので発展した。 S：江戸幕府が西廻り航路を整理したことと、新潟でも新田開発が行われお米の生産量が増えたことで新潟からたくさんのお米が輸送された。また、遠くの地域の特産品も届くようになって新潟湊が発展した。 T：発表してください。	■新潟湊が発展した要因について、多面的に説明することができる。
まとめ ・クラスのまとめ（5 分） ・振り返り（5 分）	T：各班のまとめで共通している部分はどこですか。 S：お米 S：２つの川（信濃川・阿賀野川） S：大阪や蝦夷地とのつながり S：新田開発 S：西回り航路 T：それらの言葉を使ってクラスのまとめにしよう。 信濃川と阿賀野川があることで多くの地域のお米が新潟湊に集まった。そして、新田開発により米の生産量が上がり、西回り航路の整備によって大阪へ米を早く安く輸送でき、北前船によって様々な地域の特産品も新潟に入ってきたから。 T：今日の振り返り「今日の授業で分かったこと、考えたこと」を書いてください。 S：新潟湊は海からのやり取りが盛んなのだと思っていたけれど、その背景には阿賀野川と信濃川の役割が大きかったのだと分かった。 S：年貢米を送るために西回り航路を整備した結果、北前船が売買をしながら盛んに活動したのだと考えた。 T：今回皆さんが追究してくれた主な内容の他にも、例えば長岡藩が新潟港への入港にかかる税金をかからないように手配したことなどもあります。他にも様々な要因があるはずです。ぜひみなとぴあに行ってみたり、日和山カフェで野内さんにインタビューをしたりしてみてください。	○時間が足りなければ、振り返りを先に書かせる。次時にそれを活かし、まとめをつくりあげる。

（4）評価

A　新潟湊が発展した理由について、多面的・多角的に追究し、それらを関連付けて表現することができた。

B　新潟湊が発展した理由について、多面的・多角的に追究したが、関連付けることができず一面的な表現になってしまった。

【参考文献】

・五十嵐敏雄『新潟湊の繁栄―湊とともに生きた町・人―』新潟日報事業社 2011.7.6
・老川慶喜『詳説日本史 B』山川出版社 2017.4
・鈴木聖二『みなとまち新潟の社会史』新潟日報事業社 2018.3.10
・新潟県『新潟県史』国書刊行会 1982.3
・新潟市『新潟市史』国書刊行会 1988.2
・新潟市『図説 新潟開港一五〇年史』新潟市歴史博物館　2018.11
・新潟市歴史博物館『新潟の舟運』新潟市歴史博物館　2006.7.18
・新潟市歴史博物館『新潟市歴史博物館 10 周年記念特別展 大新潟湊展 図説』新潟歴史博物館 2014.3
・北陸地域づくり協会『大河原分水双書』2005.5
・丸山雍成　編『日本の近世 6 情報と交通』(7 船による交通の発展 p 261～310)中央公論社 1992
・北前船日本遺産推進協議会「北前船 KITAMAE 公式サイト」最終アクセス 2019.10.7
https://www.kitamae-bune.com/
・新潟県庁「新潟文化物語」最終アクセス 2019.10.7
https://n-story.jp/topic/28/page1.php
・新潟日報「Nii port Press　開港 150 周年」最終アクセス 2019.10.7
https://www.niigata-nippo.co.jp/feature/kaikou150th/niiportpress/1/
・村岡 祥次「日本食文化の醤油を知る」 最終アクセス 2019.10.7
http://www.eonet.ne.jp/~shoyu/index.html

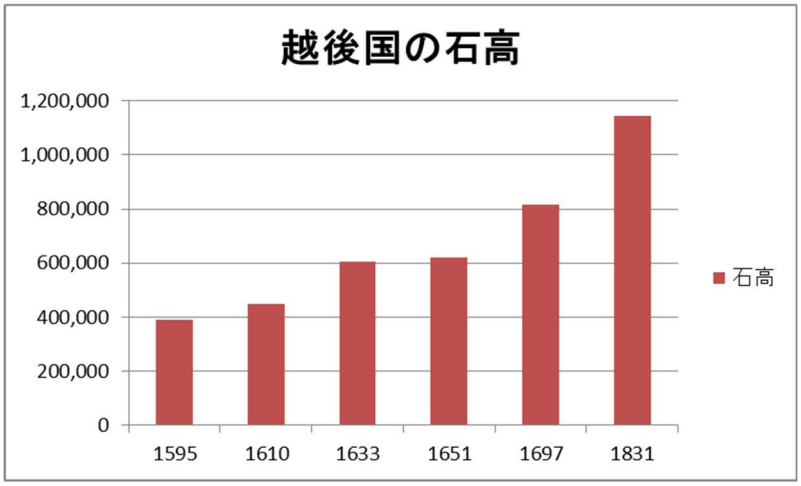
半兵衛

私たちの住む内野という地域の土地は低く海岸線には砂丘にさえぎられている平野のため、川の氾濫よりあふれ出た水はなかなかひかず、湿地帯になっていました。これは内野に限った話ではなく越後国には多い話のようです。ですが、幕府の協力もあり治水の工事や低湿地の干拓などの新田開発が行われ、たくさんのお米を育てることができるようになりました。私は海岸砂丘の内陸側に広がる塩津潟の開発が特に印象的です。

私たちは収穫高の約半分を年貢として納めていました。大量のお米を運ばなければなりません。私たちは新潟町にお米を預ける蔵があります。なので、そこまで川から舟で運んでもらいました。川の舟に関わる仕事の人にお金を払わなくてはいけませんが、重い荷物を自分で新潟町まで歩いて運ぶことと比べたら、圧倒的に川からの方がいいです。さらに遠くでは長岡、村松、村上、会津藩などからお米が新潟町を目指して川の小さな舟で運ばれていきました。遠ければ遠いほどお米を持って歩くのは大変ですもんね。また、新潟町の蔵へ集められた年貢米や売却用の米は大阪へ向かう船に乗せられることが多かったです。新潟から大阪の蔵屋敷へ運ぶように約束してあります。また、遠くの藩から新潟湊に届いた商品が内野まで届くことがあります。こないだは初めて「昆布」を食べました。食べたことがなかったので食べるときにとても緊張しました。

たまに商人が私たちのいる場所まで来て「お米を売ってくれ」と交渉しに来ます。こういうときは自分で川の舟に関わる費用を払わずに済むのでチャンスです。年貢米以外のお米を売って稼ぐことができました。お米さえちゃんと育てられれば十分生きていけます。川がなかったらとか、蔵がなかったらと思うと恐ろしいけどね…。

【資料 A-1】越後国の石高



（新潟市史，新潟県史から作成）

【資料 A-2】江戸末期の越後平野の潟と川

（大河津分水双書第 5 巻より引用）

伊藤助右衛門（北前船の船主）

私は昔、廻船という船でモノを運ぶ仕事をしていました。新潟湊からのお米も何度も運びました。その時は新潟湊を出発して、いくつかの湊を経由しながら、敦賀までお米を運んでいました。敦賀からは他の人が琵琶湖をつかいながらも陸路で京都まで運んでいたようです。私の仕事はお米を新潟湊から敦賀まで運ぶことがほとんどでした。

ですが、今は西廻り航路が整備されて安全に行き来できることもあって蝦夷地から大阪まで行き来することができるようになり、決まったものを運ぶだけでなく「売り買い」をして利益をあげるようになりました。私もお米だけを載せて敦賀まで運ぶのではなく、お米を大阪まで１か月半かけて運ぶのと同時に、地域ごとの安い商品を買い、高く売れる地域でそれを売っていきました。つまり北前船とは、蝦夷地から大阪までの間をめぐり、安いところで品物を仕入れ、高いところで売ることで売っていた舟のことです。新潟湊ではお米が安かったので、年貢米として納めなくてはならないお米に加えて、売買用のお米を買いまいた。そのお米はいろいろなところで売りましたが、私がよく売りにいったのは「天下の台所」と呼ばれた大阪と蝦夷地です。当時米を栽培できなかった蝦夷地では、米、酒、みそなどは必要な物資でありました。そのため、新潟で買ったお米は蝦夷地で高く売れました。また、新潟では魚介類や塩、昆布などが高く売れました。ここだけの話、北海道と大阪を一往復して千両も利益をあげることができました。

西風が吹くと新潟湊から船が出せないので、新潟の冬は特に泊まることが多かったです。新潟町は、堀がきれいに整備されていて商品を運びやすかったし、おいしい料理やお酒がたくさんあったり、美しい女性もいたりして良い町だったなぁ。今考えればどうして冬は西風ばかりなのだろう…？

【資料 B-1】元禄 10(1697)年の新潟湊の入荷品と金額

種別	金額(両)
年貢米 (村上藩・長岡藩・幕領魚沼・幕領三島・与板藩・会津藩・村松藩・三根山知行所・沢海藩・米沢藩・山口知行所)	108,820
三等米(売買用のお米)	104,300
大豆	59,500
小麦	2,850
大麦	2,750
小豆	1,000
アワ・ヒエ	300
木綿・小手類	25,000
西塩・能登塩	23,000
魚介類	15,000
津軽や能代の材木	10,000
酒	6,000
干鰯	6,000
薪・炭	6,000
松前昆布・ニシン	2,500
会津材木	2,000
紅花	1,000
西国クジラ	1,000
瀬戸物	1,000
染藍	500

（「新潟湊の繁栄」から作成）

【資料 B-2】
北前船 イメージ

江戸幕府　老中　稲葉 正則

1670 年頃、年貢米がなかなか集まらなくて、私たちは困っていました。そこで、当時商人として有名だった河村瑞賢に米をもっと早く江戸まで届けるルートを考えてもらいました。初めに福島のお米を江戸に送るルート、次に山形のお米を江戸に送るルートを考えてもらいました。結果から言うと大成功です。瑞賢に頼んでよかったです。

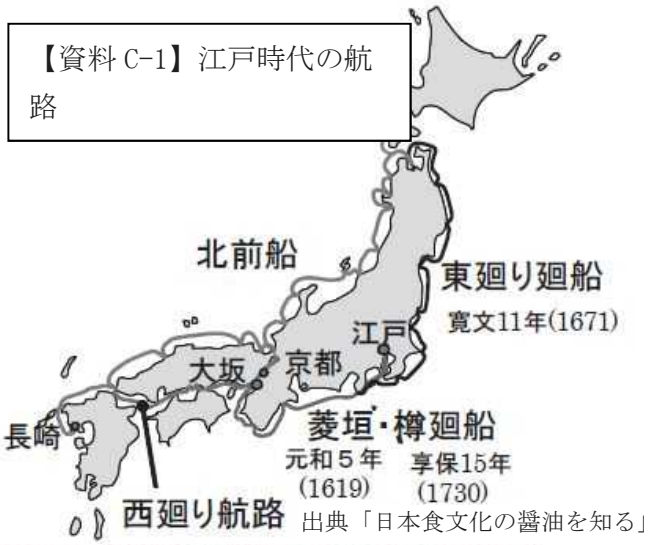
河村瑞賢は「東廻り航路」と「西廻り航路」を整備してくれました。山形から江戸までは、津軽海峡を通過して太平洋岸を通る「東廻り航路」の方が近いですが、とても危険な海域が続きます。そこで瑞賢は山形から下関、大阪を経て江戸に至る途中の各地で港を整え、長距離の「西廻り航路」を開いてくれたのです。

昔は、新潟湊を出発したお米は、敦賀で一度陸上げして、琵琶湖を通って、大阪まで運んで、そのあと江戸まで送っていたようだが、手間も費用がかかってしまう。途中でかかっていた費用を抑えることができ、なおかつ安全の運べる西廻り航路は江戸幕府としてもとても助かりました。

しかも、この西廻り航路は年貢米の輸送を向上させただけでなく、日本海における流通が盛んになり大きな経済発展につながりました。船主や商人は、この西廻り航路を活用して、以前よりも簡単で安全に長距離輸送ができるようになりました。もちろん以前から日本海には船も港も存在して輸送は行われていましたが、松前藩が蝦夷地とつながったこともあり、日本海には交流が盛んになりました。それぞれの湊も賑わっていて、私はそんな江戸時代が大好きです。

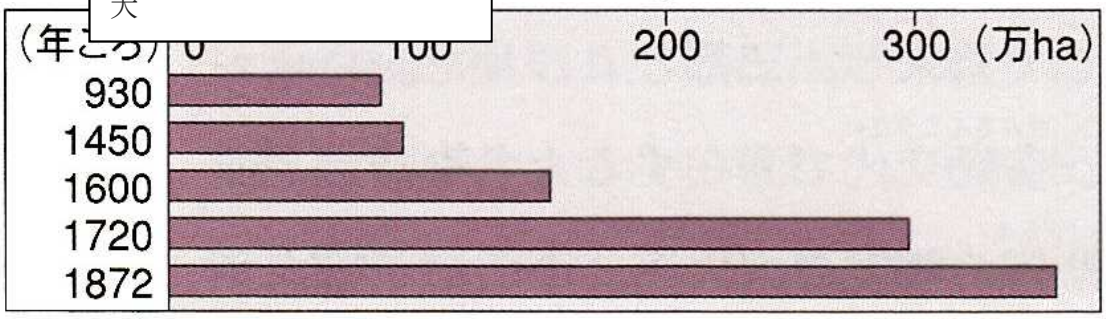
他にも日本全国の諸藩に新田開発を進めるように命令しました。越後国は川の水の流れを整備しづらくお米を育てにくいと聞いたので、これも河村瑞賢に頼んで工事をしてもらいました。越後国では、瑞賢の協力もあって新田開発が次々と進みたくさんのお米がとれるようになったみたいです。瑞賢のこの活躍には、かなりの褒美をあげる予定です。瑞賢の驚いた顔が楽しみだなぁ。

【資料 C-1】江戸時代の航路



出典「日本食文化の醤油を知る」

【資料 C-2】耕地面積の増大



出典「詳説 日本史

N 左衛門

私は野菜売りの N 左衛門といいます。毎日の生活費を稼ぐために、新潟湊のあたりで野菜を仕入れます。そのあとは、この天秤棒で商品を担いで、「旬や～旬や～かぼちゃ～かぼちゃ～～」なんて売り声を上げながら野菜を売って帰る生活です。稼いだお金から生活費を奥さんに渡して、その残り金を次の日の仕入れ代につかっています。

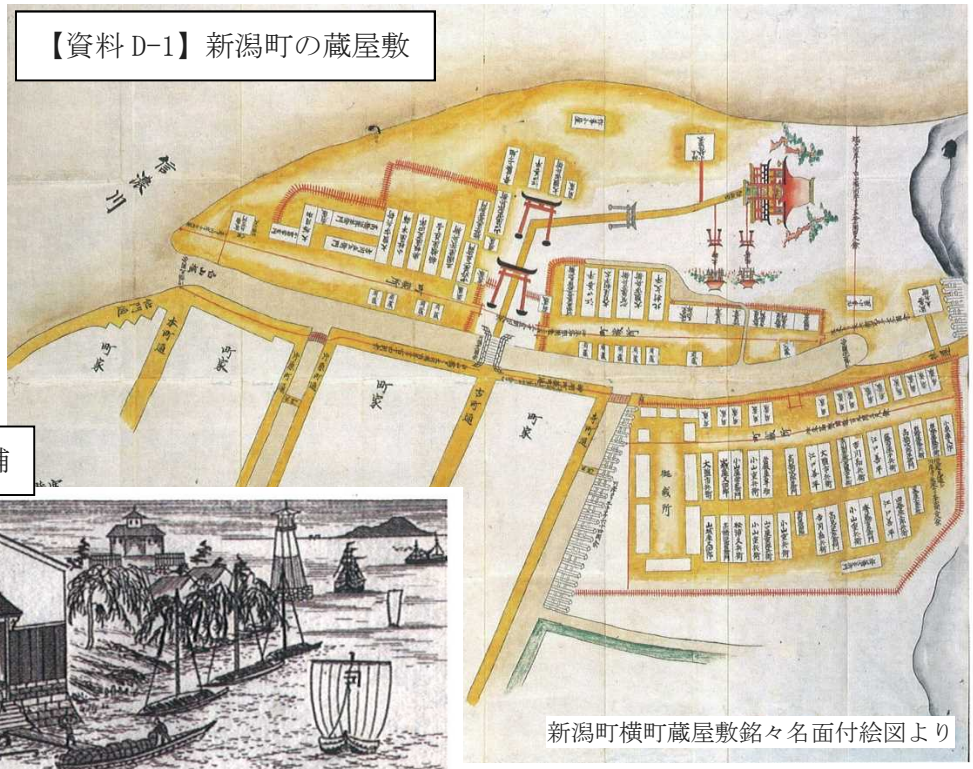
北前船が新潟湊にたくさんの商品を運んできてくれます。「これは新潟町で売れるぞ！」と思ったものを北前船の船主から買って、新潟町で売っています。その後は、海の上で北前船から買ったものを町の中に小舟で運びます。

私が暮らす新潟町には、縦横 7 本の堀がきれいに整備されています。だから北前船から買ったものを町中にとても運びやすいです。北前船から商品を買う人にとってこの堀は大助かりです。

新潟町には堀のほかに、蔵と呼ばれる倉庫がたくさんあります。長さ 18 間(約 32m)、幅 4 間半(約 8m)の蔵が 51 棟もあり、これよりも小さな前蔵が 20 棟もあります。たくさんあるので町蔵と呼ばれています。ここには、信濃川や阿賀野川から舟で運ばれてきた様々な地域のお米が納められていました。お米には、幕府に送る年貢米と、売ってお金にする売却用の 2 種類があります。様々な藩や代官は町蔵に年貢米を預け、大阪の蔵屋敷まで運んでもらっていたり、売却用のお米を新潟で売ったりしていました。北前船の船主もお米をよく買っていっていました。北前船がたくさん来るので、新潟湊とその周りの新潟町が活気で溢れていて私はその雰囲気が好きです。

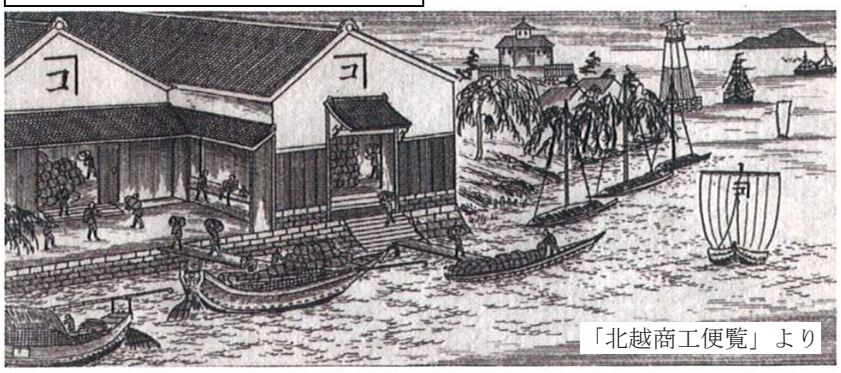
春先になると私たちは大掛かりな川の清掃と浚渫(しゅんせつ)をしています。どうも砂がたくさんたまってしまうのです。砂がたまって堀を小舟が通れないなんてなったら、新潟町は機能しなくなってしまいますからね。

【資料 D-1】新潟町の蔵屋敷



新潟町横町蔵屋敷銘々名面付絵図より

【資料 D-2】廻船問屋の店舗



「北越商工便覧」より